筑豊における炭坑の記憶継承

福本　寛（田川市石炭・歴史博物館）

1　はじめに

福岡県北部を縦貫する遠賀川流域は、かつて「筑豊炭田」と呼ばれ、日本最大の出炭量を誇った地域だった。日本近代史上、重要な役割を果たした筑豊炭田だが、1960 年代以降は炭坑[1]が次々と閉山し、1976 年には石炭産業が完全に終息した。

炭坑を失ってから約半世紀が過ぎようとする現在の筑豊では、在りし日の記憶継承に 2 つの障壁が生じた。1 つは、炭坑経験者の高齢化である。筑豊は三池や北海道に比して閉山時期が早く、現在では炭坑経験者の高齢化が著しく進み、鬼籍に入っている方も多い。2 つ目は、環境が激変したことである。筑豊では、炭坑閉山時の閉山交付金、また、閉山後の失業者対策や企業再配置等によって、往時の炭坑施設のほとんどが破壊され、失われた。風景の変化は、記憶の風化を促進する。

このような状況の中で、石炭をテーマとする田川市石炭・歴史博物館（福岡県田川市、以下「市博物館」という。）では、2 つの側面から、炭坑の記憶を後世へ伝える活動を行っている。1 つが、「ヒトの記憶を継承する」である。少しでも多くの経験談を採集、記録し、調査研究を行って、炭坑を知らない人々や世代への普及を行う。2 つ目が「モノ・場所の記憶を伝える」である。炭坑経験者が希少となり環境が一変した現在の筑豊では、当時の記憶を復元する際に有形の文化財が重要な役割を演じる。

本報告では、石炭産業を喪失した筑豊の地において、炭坑の記憶を継承する市博物館の具体的な取り組みを以上の 2 つの視点から紹介する。

2　ヒトの記憶を継承する

市博物館が所在する田川市では、筑豊最大級の炭坑であった三井田川鉱業所（以下、「三井田川」という。）が 1964 年に閉山した後、現在では 55 年が経過しようとしている。市内の炭坑関係者で最多数だったのが三井田川関係者であるが、現在、90 歳を超えた方々は閉山時に 35 歳以上、80 歳代は当時 25 ～ 34 歳ぐらいとなる。したがって、現在、存命の三井田川関係の炭坑経験者は、仕事を一通り覚えて戦力として活躍したての年代に炭坑を経験した方々といえる。換言すれば、閉山時に 40 歳代以上であった中堅・幹部職員、または熟練労働者は、現在では 100 歳近くとなる。

なお、三井田川が閉山した 1964 年時は、同系の山野や三池、北海道（砂川・美唄・芦別）が稼業していたため、職員層は配置転換が可能であった。一方、鉱員の多くは現地採用であったたため、離職後は失業対策で引き続き現地で雇用されたほか、1964 年時は高度経済成長期と重なり、新たな仕事を求めて田川から西日本各地に流出した者もいた。

このような背景から、現在の田川市内の炭坑経験者は、著しく高齢化が進んでいる上に、炭坑全体を把握できた職員層は僅かで、自分の仕事のみ精通した元鉱員がほとんどである。しかしながら、どのような炭坑の経験談も希少となった現在では、些細な話も在りし日の炭坑の姿を伝えるには必要不可欠であり、少しでも多く

(1)　本稿では煩雑さを避けるため、「たんこう」は全て「炭坑」と表記する。

の経験談を採集しなければならない。もちろん、個人の記憶はしばしば思い込みや錯誤もあるため、他者の口述や文献等と比較して裏付けや意義付けを行う作業も必要である。こうして採集された多くの経験談は、まとめられて濾過された上で、学芸員らがインタープリターとなって、次の世代へ伝えられる。

市博物館では、炭坑の記憶を継承する取り組みとして、炭坑の経験談を採集する（記録）→文献及び口述記録を整理及び調査研究を行って意義付ける（調査研究）→炭鉱を知らない世代や次世代へ普及を図る（教育普及）を行っている。まず、記録では、「炭坑の語り部」講座を開催した。内容は、三井田川で鉱員等として働いた各業種の経験をはじめ、病院や炭坑住宅での暮らしなど多岐に及んだ。講座の内容は整理して活字にまとめて記録集[2]を刊行するとともに、田川市 HP でも動画を配信している[3]。なお、講座で経験談を披露していただいた方々のうち数人は、市博物館の案内や研究者の調査対応などで引き続き協力いただいている。また、市博物館では、三井田川を様々な視点で調査研究を行う「三井田川鉱業所研究会」を 2015 年 8 月に設置し、2020 年に報告書を刊行した[4]。こうして、炭坑経験者の口述記録を採集し、学術的な調査研究を行うことで、炭坑の実態が明らかとなり、田川市の近代史の実像がより鮮明となった。

以上のような成果は、炭坑を知らない世代あるいは次世代へ還元されて初めて意味をなす。そのために市博物館の学芸員がインタープリターとなるが、特に子どもたちへ炭坑の歴史を伝えるためには、あわせて現場の教職員の理解が不可欠である。しかし、教職員も炭坑を知らない世代となっているため、市博物館では教職員を対象とした講座を開催して、子どもたちに、如何にして炭坑の歴史を伝えるかの手法を、学芸員と教職員でともに検討した。こうして、炭坑経験者の記憶は学芸員や教職員を経由して、各学校では総合学習等の地域を学ぶ授業で活用されたり、市博物館では「石炭を燃やそう」「夏休みキッズチャレンジ」や「子ども学芸員育成事業」等のワークショップを通じて、次世代へ継承されていく。

なお、石炭産業の歴史は、災害や鉱害、徴用等の問題もあり、正負両面をバランスよく伝えることが肝要である。これについても市博物館では「石炭産業と人権問題研究会」を設置して調査研究を行い、展示や教育に活かす取り組みをはじめている。

炭坑経験者の語り

3　モノ・場所の記憶を伝える―「世界の記憶」と国指定史跡―

炭坑経験者が減少して環境が一変した現在の筑豊では、有形の文化財が大きな役割を果たすようになった。筑豊では僅かに現存する炭坑遺産を、地域の歴史を証する貴重な‘モノ・場所’として、国や地方自治体が文化財指定する保護措置が図られてきた。まずは、比較的容易に視認できる地上遺構を対象とし、1988 年に旧筑豊石炭鉱業組合直方会議所（石炭記念館本館）が直方市指定文化財、1999 年には三菱飯塚炭礦巻上機台座が穂波町指定文化財（現在は合併により飯塚市指定文化財）となった。さらに、1996 年に文化財保護法が改正されて文化財登録制度が創設されると、近代の建造物が主な対象となり、筑豊の炭坑関連では、1997 年に旧三菱方城炭礦坑務工作室（福智町）、2007 年に旧三井田川鉱業所伊田竪坑櫓及び同第一・第二煙突（田川市）が国登録有形文化財となった。

近年では炭坑遺跡を含む「明治日本の産業革命遺産」がユネスコ世界文化遺産に登録されたように、筑豊の炭坑遺産にも国内外からさらに高い文化財的価値が与えられるようになった。炭坑経営者の邸宅庭園では、

(2)　田川市石炭・歴史博物館編 2010『炭坑（ヤマ）の語り部Ⅰ―平成 20 年度「炭坑の語り部」の記録―』、同編 2010『炭坑（ヤマ）の語り部Ⅱ―平成 21 年度「炭坑の語り部」の記録―』、同編 2013『炭坑（ヤマ）の語り部Ⅲ―平成 22 年度「炭坑の語り部」の記録―』

(3)　https://www.joho.tagawa.fukuoka.jp/list00857.html

(4)　田川市石炭・歴史博物館編 2020『三井田川鉱業所と地域社会』田川市石炭・歴史博物館付属研究所調査報告書

2011 年に伊藤傳右エ門氏庭園（飯塚市）、2015 年に旧藏内氏庭園（築上町）が国指定名勝となった。特に田川市では、市博物館が所蔵する「山本作兵衛コレクション」がユネスコ「世界の記憶」に日本で初めて登録され（2011 年）、また、市博物館周辺の三井田川鉱業所伊田坑跡は、筑豊炭田遺跡群の 1 つとして 2018 年に国指定史跡となった[5]。

炭坑閉山後半世紀が過ぎた現在、当時の記憶が薄れつつある筑豊において、市博物館では「山本作兵衛コレクション」という‘モノ’と筑豊炭田遺跡群という‘場所’に込められた炭坑の記憶を、保存し継承するという新しい局面を迎えた。ところで、近年では、文化財を取り巻く環境や考え方が変化しつつある。「学芸員はガンだ」の発言で反発を受けた文化財の活用は、文化財の保存をないがしろにする活用ではなく、多言語化などで訪日外国人が理解できるような活用などがビジョンとして提示されている[6]。さらには、2019 年 4 月に施行された改正文化財保護法では、地域社会の衰退に対応するために、地域総掛かりで文化財の保存活用や地域振興を目指す計画の策定が重要視されている。

以下、このことを踏まえ、「世界の記憶」と国指定史跡の市博物館による具体的な取り組みを紹介する。

（1）ユネスコ「世界の記憶」：「山本作兵衛コレクション」

炭坑労働者であった山本作兵衛（1892-1984）は、自らの経験と記憶により数多くの炭坑記録画を制作した。これら炭坑記録画を含む「山本作兵衛コレクション」は、市博物館所蔵の炭坑記録画（585 点）・日記（6 点）・雑記帳及び原稿等（36 点）、福岡県立大学が保管する絵画（4 点）・日記（59 点）・雑記帳及び原稿等（7 点）で構成され、2011 年に日本で初めてユネスコ「世界の記憶」へ登録された。世界において歴史的に重要な価値を認められた記録遺産（documentary heritage）ではあるが、ほとんどが脆弱な近代の酸性紙を使用しているため、「世界の記憶」のガイドライン[7]にしたがって、電子データや複製画を作成するなどして、原資料にかかる負担を極力減じた保存措置の上で、活用を図っている。

特に、ユネスコ「世界の記憶」の趣旨に海外への普及があることから、市博物館では山本作兵衛炭坑記録画の多言語化を行い、市 HP で公開するとともに館内音声ガイドによって、海外訪問客が「山本作兵衛コレクション」にアクセスできる環境を整えつつある。さらに、市博物館では、石炭をキーワードとして台湾と国際交流を行っており、「山本作兵衛コレクション」に包含される炭坑の歴史と文化は、筑豊と同じ産炭地である台湾でも共感を呼び、国際的な炭坑の記憶継承へと発展している。

台湾との炭坑交流

（2）国指定史跡：筑豊炭田遺跡群　三井田川鉱業所伊田坑跡

2018 年 10 月、市博物館を含む三井田川鉱業所伊田坑跡は、筑豊炭田遺跡群として国指定史跡となった。炭坑跡の国指定史跡は、三井三池炭鉱跡（大牟田市・荒尾市、2000 年指定）、高島炭鉱跡（長崎市、2014 年指定）に続き、3 例目である。今後は、我が国最大の産炭地であった筑豊炭田の歴史を顕彰する貴重な史跡として、後世へ確実に継承していく必要がある。

前述したとおり、2019 年 4 月に改正文化財保護法が施行され、文化財を社会全体で支える計画が法的に位

---

(5) 国指定史跡・筑豊炭田遺跡群は、三井田川鉱業所伊田坑跡（田川市）、目尾（しゃかのお）炭坑跡（飯塚市）、筑豊石炭鉱業組合直方会議所及び救護訓練所模擬坑道（直方市）で構成される。

(6) 明日の日本を支える観光ビジョン構想会議 2016『明日の日本を支える観光ビジョン』。なお、文化財保護法改正ともなう附帯決議では、文化財の保存と活用の均衡が含まれている。

(7) ‘MEMORY OF THE WORLD GENERAL GUIDLINE TO SAFEGURD DOCUMENTARY HERITAGE’, REVISED EDITION, UNESCO, 2002。なお、「山本作兵衛コレクション」のうち法的な保護措置があるのは、市博物館所蔵の炭坑記録画が福岡県指定文化財となっているのみである。

置づけられた。田川市では、筑豊炭田遺跡群の保存活用を可視化して、行政ならびに地域住民、関係団体が共有する史跡保存活用計画を 2020 年に策定した[8]。伊田坑跡は筑豊最大級の炭坑であった三井田川の主力坑跡であったが、現在は炭坑施設の基礎遺構が地中に残存するものの、地上遺構は竪坑櫓 1 基と煉瓦煙突 2 基のみが保存される都市公園となっている。炭坑の景観が激変した炭坑跡の史跡だが、炭坑の‘場所’の記憶を伝える数少ない文化財として、保存活用計画では史跡の価値を整理した。その上で史跡の保存管理（日常点検や史跡の現状変更基準など）、活用、整備、運営・体制を明確にした。特に活用については、三井田川鉱業所伊田坑跡は炭坑節発祥の地として、毎年「TAGAWA コールマイン・フェスティバル～炭坑節まつり～」を開催しているが、市博物館の「山本作兵衛コレクション」や炭坑資料などの‘モノ’や教育普及活動と一体となって、史跡の価値、すなわち在りし日の炭坑を伝える取り組みを行っていくことを明記した。

炭坑節まつり

4　今後の展望

炭坑経験者の減少と環境・景観の激変は、筑豊炭田の記憶の喪失を促進する。日本最大の産炭地として近代化と戦後復興を支えた筑豊の記憶を失うことは、ひいては「私たちの地域は何だったのか」「私たちは何者なのか」というアイデンティティーの崩壊を意味する。

そうなる前に、少しでも多くの‘ヒト’の記憶を拾い集めることはもちろんだが、特に筑豊では幸いにも貴重な文化財に恵まれているため、あわせて‘モノ・場所’の記憶に耳を傾ける必要がある。ヒトとモノ・場所の記憶は炭坑の歴史を証明するに加えて、当時の人々の想いまでも伝えることができる。

実際の炭坑が存在しない現在の筑豊において、複雑化した記憶の継承に際しては、炭坑に関わるあらゆる要素を結びつけて様々な場面に出力するという市博物館のハブ的な機能が、今後さらに重要となる。

(8)　田川市教育委員会 2020『史跡筑豊炭田遺跡群保存活用計画―三井田川鉱業所伊田坑跡編―』。なお、同様の計画は直方市でも 2020 年に策定しており、飯塚市でも令和 2 年度に策定を予定している。